

「住民主体の開発プロセスに向けた援助事業アプローチの課題と可能性」

－マラウイ COVAMS プロジェクト事例から－

11MD0179 室根由寛

研究の目的と方法

地域開発における住民参加の必要性は、援助関係者にとって常識的な理解となっている。しかし、短期援助事業において、長期的な住民の暮らしの変化を目的に定めた場合、開発主体は誰になるのか、開発主体の行為を支えるためには、いかなるアプローチが有効かという課題が浮かび上がる。

本論文の目的は、長期的な観点から住民への均等な機会提供を通じて、住民主体の開発プロセスの確立に向けた短期的な援助事業のアプローチとはどのようなものであるか、事例研究を通じて明らかにすることである。

外部主導の開発援助アプローチは、事業の計画性を重視することによって、短期間で一定の成果を目指している。しかし、期限が設定された援助事業では、事業目標の達成に向けたアプローチに執着しがちで、それがより長期的な観点からみたとときにどのような変化に結びつくのか、という視点が欠如しがちである。逆に言えば、それが「参加型開発」として工夫された事業であったとしても、短期的視野しか持たないとすれば、やはりそれが、長期的な観点からみて住民主体の開発プロセスに向けたアプローチになるとは限らない。つまり住民の参加を取り入れた短期援助事業に求められることは、トップダウンかボトムアップかという二者択一的な議論ではなく、長期的な観点から、住民が自らの暮らしを改善していくような開発プロセスへと結びつく機会を提供できることである。このような問題意識を踏まえ、本論文では、限定的な支援の枠組みの中でトップダウンの対極にあるボトムアップのアプローチとして参加型開発を捉えるのではなく、長期的な観点から住民が開発プロセスを通じて、住民の暮らしに変化をもたらすアプローチの検討を中心課題に据える。

研究方法は、参加型開発の先行研究に関する文献精査と、現地調査を中心とする事例の検討である。文献精査では、参加型開発の歴史を振り返り、本研究が着目する「住民主体の開発プロセスに向けた援助事業アプローチ」の背景として、ブループリント・アプローチからプロセス・アプローチへの展開を整理する。事例研究では、日本の開発援助実践において注目されている「シレ川中流域における村落振興・森林復旧プロジェクト」通称 COVAMS を先駆的な事例として取り上げる。

現地調査は、2012年7月31日から8月17日までマラウイのボランティアで実施し

た。長期的な観点から住民主体の開発プロセスを目指した、援助事業の先駆的な事例として注目されている COVAMS で用いられた事業デザインを事例として取りあげ、COVAMS によって、どのような変化をもたらされたのか、現地の住民に対して質的なインタビュー調査をおこなった。

インタビュー対象は、6 か村に対して、各村の住民(6~9 名、総数 44 名)、村長(6 名)、LF(6 名)、および専門家(1 名)に個別にインタビューを実施した。

現地調査の具体的な方法としては、COVAMS の主要活動である土壌保全対策活動に着目し、質的なインタビュー調査による住民の語りを重視した。インタビュー調査で得たデータを軸に、COVAMS の事業報告書等のデータを踏まえて、COVAMS の援助事業アプローチによってもたらされた住民の暮らしの変化について考察した。

論文の構成

第 1 章 序論

- 1-1 研究の背景と問題の所在
- 1-2 研究の目的
- 1-3 研究の方法
- 1-4 論文の構成

第 2 章 開発援助における住民参加重視の潮流と直面する課題

- 2-1 参加型開発の主張
- 2-2 参加型開発を巡る議論の展開
- 2-3 ブループリントとプロセスの相違
- 2-4 プロセス・アプローチとその仕組み
- 2-5 先駆的事例としての PRODEFI モデル
- 2-6 本研究の着眼：住民参加重視の事業における開発主体

第 3 章 マラウイ農村とシレ川中流域における森林保全政策

- 3-1 マラウイ国の概況とシレ川中流域の抱える課題
- 3-2 シレ川中流域における村落振興・森林復旧プロジェクトの概要

第 4 章 COVAMS 対象住民への聞き取り調査と分析

- 4-1 調査概要
- 4-2 調査の方法
- 4-3 調査村とインフォーマント世帯母数
- 4-4 現地調査の成果と語りから
- 4-5 LF の暮らしの変化

第5章 全体考察

- 5-1 現地調査結果から導かれた考察
- 5-2 COVAMS アプローチへの特徴:「場」の提供
- 5-3 住民主体の開発プロセスへ向けたアプローチの考察
- 5-4 まとめ

第6章 結論

- 6-1 結論
- 6-2 残された課題と展望

論文の概要

本論文は、長期的な住民主体の開発プロセスの確立に向けた短期的援助アプローチとして先駆的な事例であるマラウイの COVAMS を実際に訪問し、そのアプローチについて直接現場の声を聞取りし、事例研究をおこなったものである。

事例研究では、援助事業アプローチによる参加機会の「場」をきっかけに、長期的な住民主体の開発プロセスが展開していくことによって、住民の継続的な研修参加への動機付けに通じていることが明らかとなった。

本論文は、第1章の序論から第6章の結論までの6つの章によって構成されている。第1章では、研究の背景と問題の所在、研究の目的、研究方法、および論文の構成を述べて、本論文の枠組みを述べた。第2章では、文献精査によってこれまでの参加型開発の議論展開を整理し、現在直面する住民を開発主体とする援助事業アプローチが有効かという課題を指摘した。次に住民主体の開発プロセスに向けた先駆的な事例として PRODEFI モデルに着目し、特徴的な「誰でも参加できる研修アプローチ」の要点を示した。第3章では、PRODEFI モデルの後継事業として投入されているマラウイの「シレ川中流域における村落振興・森林復旧プロジェクト」通称 COVAMS の事例を検討し、その概要と仕組みを述べた。次に、COVAMS の特徴的な IVTA（みんなの研修をテーマにした総合型研修アプローチ）と SVTA（分野を特定し、絞り込む特定型研修アプローチ）の双方を融合して展開する2つのアプローチの特徴を整理した。

第4章では、現地調査の結果をとりまとめてポイントを抽出した。特に、インタビューによって得られた住民の語りに重点を置いて、住民の暮らしの変化を分析した。事業報告書等のデータを踏まえて、住民の語りを調査事例としてアプローチごとに整理し、分析を行った。分析から IVTA による誰でも参加できる研修によって、学習機会を得た住民は土壌保全対策、養蜂、マイクロクレジットなど様々な活動に挑戦している。

第5章では、COVAMS のアプローチの仕組みを改めて整理し、期間が限定された援助

事業の枠組みの中で、IVTA と SVTA の双方を融合して展開することによって住民の暮らしにもたらされたメイズの収量改善や養殖、マイクロクレジット等の新たな活動の展開といった変化を明らかにした。4章の現場の声を検討したことで、長期的な住民主体の開発プロセスに向けたアプローチとは、できるだけ多くの住民に参加機会を提供するアプローチと、事業終了後においても住民が主体性を確立していく仕組みを組み合わせることによって、住民の暮らしに変化を見ることができた。

第6章では、本論文の目的に立ち返り、結論を導いた。短期的な援助事業においても、適切な複数アプローチを融合して柔軟性を確保することで、学習機会の「場」の提供から住民が事業経験で得た成果をきっかけに、新たな活動を創出していく支えとなるような事業展開が可能である。これは、期限が設定された援助事業を通じて、長期的な住民主体の開発プロセスを確立していく一つの具体的な手立てとなるのではないだろうか。事例研究を通じて、PRODEFI-COVAMS へと展開してきた「機会提供型」事業の重要性を改めて指摘できたことが本論文の意義である。